

先生の長年の御苦勞の効いがある、資料センターの予算も、やっと安定した形で復活し、さらにデータベースを中心に発展する方向で進んでいることは、先生の御盡力の賜物と感謝申上げている次第である。

先生は、災害の研究成果の普及ということにも心を砕かれ、総合研究班で昭和57年に出版した「地震と災害」—研究成果普及版—は、編集作業を殆ど先生一人で意欲的に進められた。私はこの時、ライフラインの関係でお手伝いさせて頂いたが、先生はできるだけ分かり易く、よい写真を沢山のせようと努力された。その時集められたスライドが、北海道の資料センターに残る膨大な収集に発展したのだと思う。

こういう風に、先生は何事も、熱心に徹底してなさるお仕事振りで、私は、先生のそういう態度に引きつけられ、教えられることが多かった。

先生はお酒がお好きで、折にふれ誘って頂くと、風発する談論に花を咲かせ、いつも楽しませて頂いたものだった。

敬愛する酒井先生が亡くなられ、本当に淋しい思いに堪えません。先生の御冥福を心からお祈り申上げる次第です。

(さたけまさお：東北大学工学部教授)

## 酒井先生を偲んで

福 島 久 雄

昨年の秋、しばらく酒井先生にお目にかからなかったので、災害センターをお訪ねしてみようかと思っていたある朝突然のご訃報を新聞紙上で知った。平素ご丈夫なようにお見受けしたので俄かに信じられぬ気持ちであった。

酒井先生が災害科学の集りに顔を出されるようになったのはいつの頃かハッキリ思い出せない。ずい分昔のことである。先生と私との交際はこの集りを通じて始まり、遂に最後まで「災害科学」のご縁であった。

先生はいつもファイトに富んで居られた。いつの年だったか工学部の運動会でマラソンに挑戦され、トップの方ではなかったが中止されることなく完走、重い足を引きずりつつ笑顔でゴールインされた時の様子が今も思い出される。お年に似合わず頑健な心臓の持ち主と改めて印象に残った。

御息子が登山の事故で急逝されたことも強いショックであったと思う。しかし先生はやがて立ち直って一層お仕事に専念された。全国の他の地方に魁けて災害センターが北海道大学に出来たのも、先生のお力が大きかったことはここに更めて記すまでもなからう。

先生はその後もセンターの育成に渾身の力を揮って盡された。ご在任が長いので、屢、他の地

方から批判もないわけではなかったが先生は自ら「居寄り災害」と自己反省をしつつその努力を傾注された。

ちょうど台風が一方では豊かな水量をもたらすように、先生が北海道の災害研究に活力を注ぎ込んだご功績は忘れることが出来ない。その一つ一つについてはまたそれぞれ記する人があるであろう。

最後に一つ。いつのことであったか、私と二人きりの時、先生はふと自分の研究に専念できなかった寂しさを洩らされたことがある。しかしこの二、三年、センターの責任から離れてからはご自分のお仕事に打ち込まれていたようにお見受けした。先生のご健康ならば残された時間は充分にあったと思われるのに、突然のご発病がこれを中断した。誠に残念であられたと思う。

謹んでご冥福をお祈り申し上げる次第である。

(ふくしまひさお：北海道大学名誉教授)

## 酒井さんの思い出

田治米 鏡 二

少年の頃から大学を卒業する迄、酒井さんは「学業・操行共に優」を続けたのであろう。このレッテルがその後も酒井さん自身に貼り付いていた。大学卒業後の酒井さんは高名な武藤清教授の下で若手時代を過ごした。

武藤先生は研究面においても運営面においても建築界の並はずれた大物であった。「武藤先生のお相伴を繰り返しているうちにボクは酒が強くなった」と自身が何回も述懐したように、酒井さんは武藤先生の運営面の大物ぶりに特に気を惹かれ、忠勤を励んだものと察せられる。数多の俊秀がひしめく武藤門下にあって、此れは1つの見識ある選択と思われる。

酒井さんの生き方は、「優等生」らしく、堅実を宗としていた。航空機による国内旅行が現在程普及していなかった頃の名残か、酒井さんはJALに決めていて、割引の航空券に手を出さなかった。半呑み込みを排して、完全な理解を追追求した。だから自分の考えを説明するのに優れており、講義も得意だったに違いない。

ただし堅実性と完全主義は発見・発明と相反する面がある。研究は冒険を伴う賭けである。少なくとも研究発表には敗北の危険が付きまとう。故にこそ勝利の喜びは大きいのである。次々に新しいテーマを求めて荒野を放浪する類の研究や、常に批判者の晒し物になる研究発表は酒井さんに向かなかったように思われる。

私は酒井さんと違って少年時代から碁、将棋、麻雀、トランプの勝負事が好きで、負けて帰って眠られぬ夜を何回も経験している。テニスの勝敗に青春を賭けた時期もあった。だから論文を発表するのも「負けて元もと」の安易な気持ちである。間違いのある印刷物を世に出すのは公害